

歌人探訪



昭和50年(熱海にて)

大野誠夫

石井松夫

戦後の短歌史をひもとくと、必ず行きあたる一冊の歌集がありま
す。それが大野誠夫の『薔薇祭』です。

どんな歌集なのか、しばらく作品を見てみましょう。

降誕祭ちかしと思ふ青の夜曇りしめらひ
雪ふりいづる

新しく興る象かこがらしに葭簀を張りて
響ぎけるかも

安息の歌ごゑきこゆ冬まひる白き階段を
しづかに上る

焼土にためらひもなく雪ふれるまひるの
ころはつかに痛み

いずれも昭和二十年の作品です。この年の八月に日本は終戦を迎
えました。ですから、これらはまさしくその直後の姿を描き出して

いるわけです。二首目の「響ぐ」は商いをする意。空襲で焦土と化
した町に、それでもあちらこちらとバラックが建ち、一方では何か
を商おうとする人々も現われ始めます。人々の懸命な生活の姿、そ
れが「こがらしに葭簀を張りて」という簡潔な描写によく表われて
います。とにもかくにも、「生活」という形あるものを営み始めた
その姿に、作者は未来にひらけるあるものの象を感じとっているの
であって、それがこの歌を明るく感じのものにしています。

土のうへ石のうへにも夜々はさだめのこ
とくいのち眠れり

幼きら並びて靴を磨きをり孤りの生きの
すべなく勁き

片隅に薺と倚り添ふ浮浪孤児漂ふごとき
この実在よ

石のうへ肩すりよせて眠りしが寒き朝明
けにいくたりか死にぬ

こうした歌を拾い出しながら、私は言いようのないある思いにと
らわれます。おそらくは子どもとか老人とかが、死につながる眠り
を眠ろうとしている——そうあること以外になすべき方法のない
——現実が確かにあって、そのことが五十年以上の時空の壁を超
え、私を大きく揺り動かし、私自身の思いの表白を求めてやまない
かのように思われるのです。

優れた作品とは完成してそこにあるのではなく、読者の心の近づ
きを待ちながら、しだいにその深みを見せてくれるのではないか、
と大野誠夫の短歌を読みながら、私はそんなふう思うようになり
ました。

ところで、次の作品はどうでしょうか。

絶望に生きしアントン・チェホフの晩年
をおもふ胡桃割りつつ

泥白く乾く路上に匂ひつつきらめき過ぎ
し清き耳環よ

紫蘇の葉の低むらがり光差しみづから
を待む心ぞ熱き

激動に揺すらるる身にこゑひびく美しき
ものは失ふべからず

これらの歌は、いずれもちよつとした心の起伏をもとにして、自

在に想を広げているよう
に思えます。

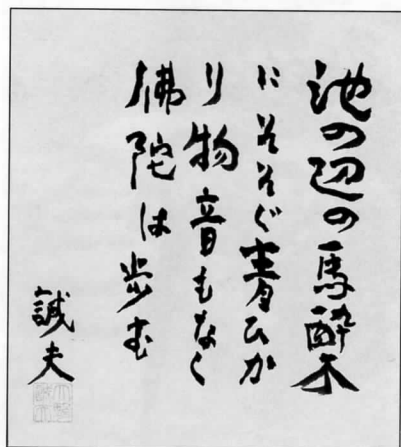
『薔薇祭』は敗戦直後の
都会風俗を歌ってはいる
のですが、しかしそれだ
けではなく、そこに生き
る人間（作者自身も含め
て）のひたむきさや切実
さ、あるいはそれゆえの

苦しみや哀しさなど、実に多様なものを深い抒情で歌いあげている
のです。そして、それらの作品の中心をなすものといえば、時代が
混沌としていればなおのこと持たずにはいられないへ美しきものへ
の憧憬^{しんけい}であると言えるでしょう。

歌集の名称は、敗戦の町の映画館で観た、薔薇をささげて平和を
求め、祝福する、西洋のある小さな国の祭にちなんでつけられたも
のでした。

大野誠夫は一九一四年（大正三年）、茨城県生板村（今の河内町）
に生まれました。大野家は大地主で、誠夫は生後すぐ里子に出され
ました。六歳になったとき父母のもとへ戻されたのですが、後年当
時のことをふりかえって次のように記しています。

愛された記憶どころか、私の場合は、父母と肌をじかに接した
体験がまるでないのだ。彼等が私を見る眼は、よそよそしいなど
と言っては、生ぬるい。それは、異種族を見るような、または、



自筆の色紙



茨城県河内町の生家

汚物を見るような眼つきで、顔を顰めて一瞥し、さっと視線を逸らすのである。

とは言え、前言をひる

がえすようだが、正確に表現すれば、彼等と私の肉体の一部が触れ合ったことがあるのだ。それも、二度や三度ではなく、実に数え切れぬくらいある。(中略) 有体にいうと、

彼等の拳骨や平手を、私は、頭と言わず、腹と言わず、腰と言わず、じかに、それもしたたかに受けたことがある。(『或る無頼派の独白』)

そうした不幸な少年期を送った誠夫は、十七歳のとき、「ささがに」という短歌結社の会員となり、歌の世界に第一歩を踏み入れることとなります。この発行所は東京で、紹介したのは、通学している県立竜ヶ崎中学校(現竜ヶ崎第一高等学校)の国語教師である長南杜子夫でした。

街道に光溢れて春さびし荷曳ける馬は疲れてゐたり

発行の時期は『薔薇祭』よりも後になりましたが、初期作品を収

める第一歌集『花筏』の冒頭を飾る作品です。続いて次のような歌もあります。

ていぶるに春の橙がひとつありしんじゅんとしてひかる存在

「しんじゅん」とは、一般には水などがしみ込むことを表わすことばなのですが、ここでは静かであるおいをもったようすを、その音感で表わそうとしたものでしょう。

二首ともに優しく、そして美しく、あの少年期を経てなおこうした作品が生み出されたということに、私は目をみはる思いがします。昭和七年、旧制中学校を卒業した大野誠夫は画家を志して上京し、熊岡洋画研究所に通いますが、間もなく病を得て帰郷します。そして昭和九年、「ささがに」から杉浦翠子の主宰する「短歌至上主義」に移り、業界紙の記者などをしながら、約十年間ここを作品発表の場としました。その後は同誌の廃刊に伴って「鶏苑」の創刊に加わり、さらに昭和二十八年には同誌の後継誌「砂廊」を創刊、編集発行を行ないました。この「砂廊」は昭和三十五年に「作風」と名称が改められ、途中発行所がそれまでの埼玉から熱海に移されて、現在に至っています。

その間、昭和二十二年には、当時気鋭の歌



ひで子夫人と(昭和56年、熱海)

人たちが構成された「新歌人集団」に参加、翌二十三年には「薄明」四十二首を発表し、高い評価を受けました。

次に第三歌集『行春館雑唱』の中から何首かを引いてみましょう。

何ひとつ解決のなき昨日今日街暮れて桜

桃一包買ふ

さびしかる生きをしたるか幼子の肖像ひ

とつ壁に掲げて

オリーブの木を焚き待てば匂へる火愛の

終りの夜とも思ふ

これらの作品には共通したある心情がうかがえます。それは孤独さとほのかなあたたかさ、とでも言ったらいいのでしょうか。一首目の「桜桃」の語にはほのかな情意が見えますし、二首目には「さびしかる生き」を生きた人への共感が感じられます。これらは昭和二十六年の作品ですが、その二年前、大野誠夫は離婚し、一人娘を別れた妻の方に残してきているのです。「幼子の肖像ひとつ壁に掲げて」とこの歌に歌われた人はどういう人かは分かりませんが、そういう境遇に限りなく心を寄せたであろう作者の心情は、十分に推察できます。

三首目、これは空想の歌です。燃える火が匂う、ということはいま、まず実際にはありえません。ありはしないけれど、もしそうあったとしたら面白いだろうな、とそう思う心がこういう表現を可能にしたわけです。下句は上句が定まったときに自然に口をついて出てきた、という趣です。

詩（歌）というものについて、大野誠夫は次のように述べています。

詩は本質的に楽しいものである。だから悲しい詩はあっても、不快な詩というものはない。楽しからざるものは、もはや詩ではない。詩人にとって、彼の人生がどのように暗く寂しく貧しく、みじめなものであろうとも、彼の書く詩は楽しく、詩を書いているときの心は楽しい。詩人は美的感動によって、読者の心を無限に高い豊かな波へ誘い出すものである。（「青春の恢復」）

これは昭和二十二年に書かれた文章の一部ですが、こうした思いは、大野誠夫が生涯持ち続けたものでした。



右・誠夫、左・上田三四二（昭和46年）

人知れず脱皮を終へてしばらくは光のなかにうづくまりをり

『山鴨』

一般に昆虫類や爬虫類はちゅうるいは、成長の過程で脱皮を行ないます。では、この作品はどんな小動物を描いたものなのでしょうか。蟬せみか蝶ちょうか、それともへび類か。——いや、そういう詮索せんさくこそは、実は全く無意味であると言わなければなりません。

脱皮をしている時間は、それを行なう生き物たちの生涯の中で最も無防備な状態です。自分を鎧よろこうものは何も無いし、その場を逃れるすべすらない。そういう死と隣接する新しい生の一瞬をとらえ、



左から誠夫、ひで子夫人、長男・曜吉（昭和50年、仙台・青葉城跡）

作者は、広く命そのものが本然的にもっているあやうさと純粹さというものを表わそうとしたのです。脱皮を終えて、今まさに光のなかにうづくまっている、そういう表現をとって、初めて、命そのもののもつ輝くばかりの不思議な美しさが普遍的なものとして描き出された、と言え

るでしょう。

実は、大野誠夫の短歌の特色の一つは、このへんにも関係しています。作者自身のことか、他の人のことか判然としない、つまり自他の区別、あれとこれとの区別をあえてつけないという特有の表現の仕方です。彼我の別をあまり重要視しないというこの方法は、短歌とは私性を超えて独立した一つの作品世界をつくりあげるものである、という立場にもつながります。

次に、私のとても好きな一首を取りあげてみようと思います。

完結をなしたる生のおごそかに光りあひ つつ墓並ぶ丘

『象形文字』

これは昭和三十七年、大野誠夫四十八歳のときの作品です。前年の八月、誠夫は胸部疾患のため、埼玉県浦和市の市立療養所に入院しました。この歌は「恢復期」と題する五十首ほどの中の一首です。考えてみれば、人の生涯は多様であって、中には慟哭どうくだけを周囲に与え、早世してしまつた人などもあるでしょう。そういう残された側から見れば、「完結をなしたる生」などとはとても言えないかもしれません。しかし、病からようやく身を解き放たれようとする作者には、そうした生涯を生きた人さえも、まぎれもなくこの地上にひとときの生をうけ、みずからの生を完結していった一人のように思われるのでしょうか。丘に並ぶいくつもの墓、それは生の苦しみから解き放たれてそこにあるのではない。もっと明るく、人間の多様な生涯が多様なままに肯定され、「完結をなしたる生」として表現されたことに、私は真の詩人の姿を見、詩の本質に触れたあの一文の述べるものをあらためて思いおこすのです。

最後に、大野誠夫の晩年の作品を引いてみましょう。

淡紅と眺めしは若き日の怨みうすずみ色
にさくら咲き満つ

『水幻記』

水の辺の黒衣の尼僧はばたきてうつつの
蝶の群にまじはる

同

幾日も座して行く水を観続けしひじりの
すがた恋しきころぞ

『水観』

積むは枯葉降りくるものも枯葉にて簡浄
の音立てて相触る

同

『水幻記』の一首目、「怨み」の語の用い方が絶妙で、薄墨色に咲く桜を前に、うよきとせつ 紆余曲折を経て生きてきた一人の人間の心のひだがほの見えるかのようなようです。二首目、これは幻想の歌です。オオムラサキのような大きな蝶からの連想なのかもしれません。妖しい静寂美の世界をつくりあげています。

続く二首を収める『水観』は大野誠夫の第九歌集（遺歌集）です。歌集の名称は引用した歌からとられました。この二首は調べがよく透っていて、思いも深く、秀れた作品です。

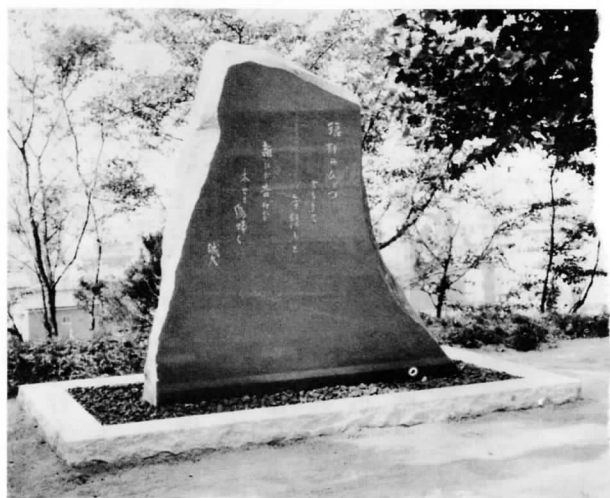
大野誠夫は昭和五十九年二月、六十九歳で他界しました。そして昭和六十二年八月、誠夫を慕う多くの人々の手によって、母校茨城県立竜ヶ崎第一高等学校の校庭に、歌碑が建立されました。刻されたのは次の一首です。

琅玕のひとつまもりて年経しと誰にか告げむ木々に鳥啼く

この歌について、碑陰に刻された撰文の一部を紹介しましょう。

中国に琅玕ろうかんという青緑系の美しい石がある。彼はこの宝石の貴さを愛し胸中ふかく秘め、おのれを高く持して人生を生き抜かんとする心の喩たとえとした。誰にか告げむ木々に鳥啼くに見られる自負と歓喜。いかにも気概あふれる歌である。

彼の名は大野誠夫。有志、相図り、ここ緑かろの地に永くその名をとどめる。



竜ヶ崎一高校庭の歌碑

(いしい・まつお 「作風」同人)